

恐るべきシンメトリー —ダンテの読者、挿絵画家としてのブレイク¹⁾—

浦 一章

Tyger! Tyger! burning bright
In the forests of the night,
What immortal hand or eye
Could frame thy fearful symmetry?

まず第一に次のことを指摘しておきたい。「神曲」の挿絵画家として通俗的なレベルでもっとも著名なのは、イタリアではギュスターヴ・ドレであろう。リッツォリ社刊の廉価版のお蔭である。これに対して、日本では、おそらくウィリアム・ブレイクがもっとも著名であろう。2003年1月、ブレイクの挿絵を添えた「神曲」訳が文庫版（集英社）で刊行された。これは実質的には、1974-76年に刊行された豪華大型版を再版したもののだが、大型版ではブレイクの挿絵が微細に観察できたのに対して、文庫版は同挿絵の入手を飛躍的に容易にした。翻訳者寿岳文章（1900年生・1992年歿）はブレイクのすぐれた研究者であったが、ブレイク研究の発展がある段階でダンテ研究と結びつくのは自然であり、合理的である。

『神曲』の挿絵を描いたブレイク（1757年生・1827年歿）はダンテに関するいくつかの見解を書き残している。それらの見解はことば数少なく表現されており、総数も多くはないが、イタリアおよびイギリスのふたりの詩人の間に存在した「恐るべきシンメトリー」（fearful symmetry）をはっきりと垣間見させてくれる（『無垢と経験の歌』所収の短詩「虎」参照）。換言すれば、ブレイクはダンテの厳しい批判者である。確かに、『天国と地獄の結婚』では、ダンテはシェイクスピアとともに尽きることのないインスピレーションの源泉として讃えられている。『結婚』はG・ケインズによれば1790-93年頃の作と推定され、この

時点でのブレイクのダンテに関する知識はまだ深められていなかったものと思われる。1800年頃、ヘンリー・ボイド訳「地獄篇」に書き込みをした際にも、ブレイクはダンテをシェイクスピア、ホメロスと結びつけている。文脈からすると、これら3人は想像力に訴える真の詩（道徳律から自由な詩、激しく時に暗い情念を主題とした詩）の代表者として扱われているように思われる。ダンテの政治的態度に対する批判がかすかに顔を覗かせているが、総体的に見ると、この書き込みにおけるブレイクの批判は『神曲』の作者というよりは翻訳者の序論に向けられている。その後、1825年以降になって『神曲』挿絵に関する注記が書かれた時には、ふたりの詩人間の対照はきわめて明瞭なものとなった。この間ブレイクは『神曲』のイタリア語版を入手し、原典でダンテを読めるようにイタリア語の学習に着手していた。ふたりの詩人間の関係のうち、ここで問題とされるのは、とくに最後の局面である。しかしながら、やがて激越な批判に変貌することになる徴候現象も視野に含めるべきであろう（徴候現象がそれと認識されるのは、しばしば現在から過去を振り返って見る場合だとしても）。

中世末のフィレンツェに生まれた預言者とロマン主義時代のロンドンに生まれた幻視家。両者の性格・個性が示す「恐るべきシンメトリー」、大きな相違。それがどこにあるのかを明かすことがこの報告の目標である。分析は(1)「罪の赦し」(forgiveness of sins)と「復讐」(vengeance)、(2)遠い神と近い神、人間知性の限界と予定、のふたつに焦点を絞りながら展開してゆくことになる。それゆえ、ダンテの「あの世」をブレイクがどのように視覚化したかという問題は副次的にしか触れられない。

1. 「罪の赦し」と「復讐」

『神曲』挿絵に関する注記の中でブレイクは次のように述べている。

ダンテの『神曲』の中のあらゆることは、暴君的な目的のためにダンテがこの世をすべての基礎としたことを示している。記憶の女神がダンテにインスピレーションを与えるのであって、聖霊なる想像力が与えるのではない。……

ダンテの最高善とは、あたかも父なる神あるいはイエスよりも優れた何か

であるようだ。もし神が善人にも悪人にも雨をもたらし、義人にも邪まなる者にも陽の光を恵まれるのであれば、神がダンテの地獄や、司祭たちが説明しているような聖書の地獄をお造りなっただけではないからだ。それは元来悪魔自身によって造られたものに違いない。私はそのように理解する。

罪を罰するために書かれた書物、罪の赦しに反して書かれた書物はすべて、父なる神のものではなく、地獄の父、糾弾者サタンのものである²⁾。

『神曲』の中で「復讐*vendetta* (= *vengeance*)」という言葉が「罰」の意味で多用されていることは言うまでもないことである³⁾。そして、『神曲』の彼岸の世界が厳格な「因果応報」(*contrappasso*)の原理によって支配されていることも、周知の事柄であろう。この「因果応報」を、もっとも明瞭な形で表わしているが、「地獄篇」第28歌ベルトラン・デ・ボルンである。ベルトランは厳格な神の裁きを指すためにまさにこの「因果応報」という言葉を用いているが、これは「～に対して」を意味する「*contra*」と「苦しむ *patire*」に由来する「*passo*」(苦しみ)が合成されたもので、「犯した罪に対して下される苦しみ、罰」を意味する。「因果応報」の原理により、ベルトランは頭部を胴から切り離されているが、それはこのトゥルバドゥールが生前イングランド王ヘンリー2世とその息子ヘンリー(「若王」と一般に呼ばれ区別されていた)の間に不和の種を播き、プランタジネット家の統一を乱したからである。ダンテの描くベルトランは、罪と罰の間の対応を明確に示している。「このように結合していた者たちを引裂いたから、胴内に宿る源から引裂かれたこの頭を、ああ、私はこのように持ち歩くのだ。私において因果応報はこのようにして果たされている」(「地獄篇」第28歌139-42)。ふたつの裁断(人間関係の破壊と身体の分断)は「恐るべきシンメトリー」の関係に置かれている。頭を切断されたベルトランの視覚的イメージはダンテにおける「因果応報」の概念を理解する助けとなろう。ただし、ブレイクもドレもいささか正確さを欠いている。ダンテとウェルギリウスは第9ボルジャの上にかかる石の橋に位置していなければならないからである。(図1および2参照、375頁)。

註釈者らは「因果応報」の由来を説明するために、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』(V, 5, 1132b)やトマス・アキナスの『神学大全』(II, II, q.61,

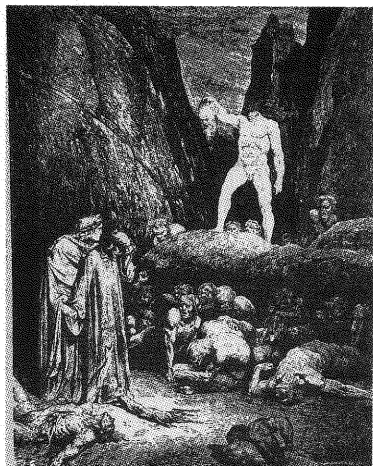


図1

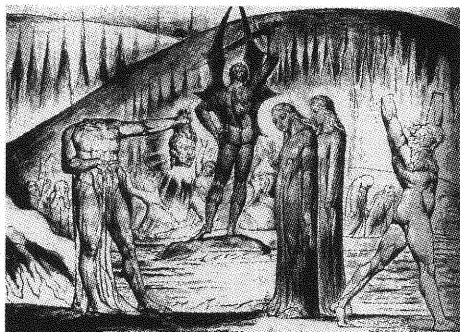


図2

art.4) に言及するのが常であるが、ブレイクはそうした学識を沈黙に付して、むしろ「ダンテの地獄」と「司祭たちが説明しているような聖書の地獄」を平行関係に置くことに関心を示している。ブレイクが「因果応報」の本質を即座に見抜き、それが同害報復法の一変種だと考えたことは大いにありえそうな事柄であろう。同害報復法は聖書（とりわけ旧約聖書）を通じてブレイクにはすでに見慣れたものになっていたと考えられるからである。実際、1822年の作『アベルの亡霊』において、復讐を求める主人公に対して、ブレイクは「命には命を」という台詞をあたえている⁴⁾。これは通常の「目には目を」に変奏を加えたものだが、同害報復法の本質を同じように簡潔かつ厳格に述べている。「命には命を」の直後には、「生贄には生贄を、血には血を」という台詞が配されており、同じ概念が強調されている⁵⁾。

上で引用した一節において「ダンテがこの世をすべての基礎とした」と述べた時、ブレイクがダンテの彼岸の世界に見出したのは計量原理の投影にほかならなかった。この計量原理はわれわれが生きている現世における正義の根本にあるものである（それゆえ、正義の女神の図像にはしばしば秤がシンボルとし



図3

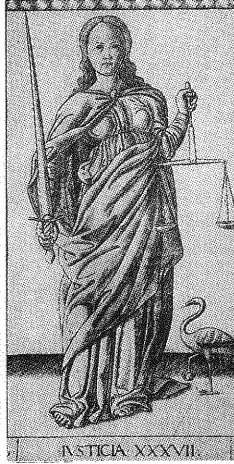


図4



図5

て賦与されている [図3、4、5参照]。因みに、「箴言」11、1は、「欺きの秤は主に忌み嫌われ、公正な重りは主の意志にかなう」と述べて計測の正確さを助言している。正確な計測は神の性格と意志に合致するものなのである)。そのため、ブレイクはダンテが世俗的であり霊的ではないと考えたが、正義の根幹にある原理とは実質的に物質世界の計量原理と同じものだからであろう⁶⁾。上述のポイドに対して、「ダンテはシーザー、皇帝の側の人間だ。……ブレイクはシーザーにあまりに多くのものを与えずぎている。彼は共和主義者ではない」⁷⁾とブレイクが書いた時、おそらくこの投影に対する批判がすでに萌芽状態にあったものと思われる。ブレイクはこの「地上の天上への投影」とも呼ぶべきものを、霊的な場であらねばならぬ教会の中にも見出した。それゆえ、ブレイクと教会の間にも「恐るべきシンメトリー」があった。ブレイクが当時の教会で出くわしたのは、頭を下にして磔られたキリストであった⁸⁾。1818年頃の作とされる『永遠の福音』で、ブレイクはこの対照関係を「両方とも日夜聖書を読んでいる。だが、ぼくが白と読むところを、君は黒と読む」⁹⁾と表現している。1827年に主祷文のソーントン訳が出されると、ブレイクはこれを大胆かつ不敬とも言うべ

きパロディに仕立て上げている。「物質的、天文学的、望遠鏡的天にまします、われらが父アウグストゥス・シーザーよ。汝の御名、称号に聖性のあらんことを。汝の影に崇敬のあらんことを。汝の王国がまず地上に生じ、しかるのちに天上に樹立されんことを。……神とは王たちの寓意にすぎず、それ以外のなものでもない」¹⁰⁾。いささかマルクスと類似してはいなくもないが、ブレイクは道徳律もやはり地上の力関係（支配者対被支配者、富者対貧者）の投影にすぎないと見なしていた。1810年作『最後の審判の幻影』には、次のような一節が読まれる。「この世では、いわゆる道徳的美徳をもたなければ自由にはなれない。そして、いわゆる道徳的美徳というものを憎悪する人類の半分を隷属させなければ、美徳をもつことはできない」¹¹⁾。また、1820年作『ラオコーン』で、ブレイクは「善悪とは貧富のことで」¹²⁾とも述べている。それゆえ、すでに触れたように、真の詩とは常に善悪の彼岸に位置し、道徳律から自由でなければならないのである。

他方、ブレイクが「復讐」に対して主張する「罪の赦し」とは、数量化しうる世界とは完全に無縁だという意味合いにおいて、霊的な原理である。無限と有限の間にはいかなる釣合い・割合もとれないように、「赦し」と「罪」の間には釣合い・割合のとりようがない（「罪」と「罰」、すなわち「罪」と「復讐」の間ならば、釣合い・割合のとりようもあるのだが）。「赦し」をきわめて重要視していたため、ブレイクは確信した調子で次のように述べている。「罪の赦し。これのみが福音であり、これがイエスによって明かされた命と不死である」（『永遠の福音』）¹³⁾。「すべての欠点・悪徳を互いに赦しあうこと。そのようなことこそが天国の門なのだ」（1793年『天国の門』）¹⁴⁾。「福音とは罪の赦しであって、いかなる道徳的教えをも持たない。道徳的教えはプラトンやセネカ、ネロに属することだ」（1798年、ワトソンへの書き込み）¹⁵⁾。このように強調された「赦し」が実行可能かどうか、計量の原則なしで現在の社会がうまく進んでゆくか、当然疑問がわいてくるころであろう。もしも実行されたなら、「赦し」はわれわれの今日の社会システムを根底から揺るがす革命的な効果をもつことになり、それゆえに聖職者さえも実行をためらうであろう。イエスがもたらした福音とは、ブレイクによれば、「罪の赦し」にほかならないが、それは恐るべき復讐の神（結局は旧約の神と同じもの）を決して廃止することはできず、ブ

レイクは常に夢想家にとどまることになろう。

最初に引用した一節に見られるブレイクの二番目の批判点は、ダンテが想像力ではなく、記憶をインスピレーションの源泉としている、ということである。ブレイクがそのように考える時、その念頭におかれていたダンテの詩句とは、例えば次のような一節であろう。「ああムーサイよ、たかき才知よ、今ぞわれを助けたまへ。わが見しことどもを書き写せし記憶よ、汝の卓越せしこと、ここにぞ明らかとならむ」（「地獄篇」第2歌7-9）。純粹に知性的な存在すなわち天使たちは神という鏡を覗きこめば必要なことを理解することが可能なので、記憶を必要とすることはあるまい。その神は、移ろいゆくことのない永遠の今の中で、現在・過去・未来をひとつに見ている。ポエティウスの言い方をすれば、この神には「予見する」という概念はあてはまらない¹⁶⁾。なぜなら、「宇宙に散在している [もろもろの] もの」（「天国篇」第33歌87）をひとつにまとめ上げた一巻の書物が神の眼前には常に開かれているからである。ダンテは彼岸の世界を長く旅した果てによくこの書物に一瞥を投げかけ、この経験を記憶の限界ゆえにわずかのみ保持することができる。これに対して、ブレイクは困難な旅をすることもなく、いつも自分の掌に宇宙の不思議なヴィジョンを映しだそうとする。1803年頃の短詩『無垢の予兆』の冒頭で、ブレイクは「一粒の砂に世界を見、野に咲く花に天を見ること、掌に無限をとり、ひと時の中に永遠をつかむこと」¹⁷⁾と述べている。この「宇宙の結節」とでも呼ぶべきものを掌に見ることを可能にしてくれるものが「想像力」であろう。「想像力」はブレイクの思想の中心をなすものだが、きわめて特殊で難解な概念である。ブレイクが記憶を自然と結びつけているからには、対概念としての「想像力」は何か超自然的なものでなければなるまい（実際、ブレイクはそれを「聖霊」と結びつけている）。しかしながら、「想像力」がわれわれの内側で働かなかつたならば、掌に宇宙の神秘的なヴィジョンを映しだすことは困難であろう。ブレイクが「想像力」と呼ぶところのものは、それゆえ、超越的であると同時に内在的な原理、換言すれば、われわれ自身の内部に常にある近い神ということができよう。「想像力」の問題には先で再び触れる¹⁸⁾。

2. 遠い神、近い神

ダンテのあの世を司っている「復讐」の神は神秘のヴェールに包められた神でもあるが、それは神の考え（摂理）が人間の知性はおろか天使の知性からも大きな深淵によって隔てられているからである。ダンテ『饗宴』の一節（第4巻5章1）は、「天使や人間の判断力をまったく超越した神の摂理」について語っている。同じく『饗宴』でダンテは神を「何ものによっても制限されない者、すなわち、無限の能力をもって無限をひとり理解するところの……最高善」（第4巻9章3）、「ひとり自らのみが自らを完全に理解するところの光」（第2巻5章11）と性格づけている。例として、『神曲』（とりわけ「天国篇」）からもいくつかの箇所を引いておく。「神慮の深淵」（「天国篇」第7歌94）、「あらゆる被造物の眼差しを打ち負かし、奥底にたどり着けなくしてしまうところの、あの〔神の〕賢慮」（同第11歌29-30）、「〔神の〕永遠の正義に対して、汝ら〔被造物〕が与えられた知力は、眼差しが深海の中に入ってゆく程度にしか、入ってゆくことができない」（同第19歌58-60）。これらやこれらに類した表現によって描きだされる遠い神は、予定が問題となるところで、冷酷かつ非人間的な側面を示すことになるが、この件に関してブレイクは1790年頃ほとんど怒りをこめながら次のように述べている。「現世の生の後の予定はカルヴァンの唱える予定よりも忌むべきものである。スエーデンボルグは、そのような霊的世界の予定論者である。……呪うべき愚考だ」¹⁹⁾。『神曲』における有徳な異教徒の定めとはどのようなものであろうか。彼らは救われるのであろうか、断罪されるのであろうか。この問題には、われわれ東洋人も無関心ではいられまい。

導師であるウェルギリウスに対して、辺獄（リンボ）において、次のように質す時、ダンテは師の最終的な定めを気づかっている。「自らの力によるにせよ、他人の力によるにせよ、ここ [= 辺獄] を抜け出て至福に達したものは誰かあるのでしょうか」（「地獄篇」第4歌49-50）。しかしながら、ダンテは賞讃すべき公正さをもって「インダス川の岸辺に」（「天国篇」第19歌70-71）生まれた者たちをも弁護している。異教徒である東洋人たちが、理性によって可能な範囲内で、思考においても言動においてもできる限り廉直な生を営んだ後に、キリストのことをいささかも耳にすることなく死んだとしたなら、彼らを地獄に落と

すことは正しいことであろうか。彼らの罪はいったい何なのか。こうした疑問をダンテは第六天で、正義の象徴たる聖なる鷲にむける。ダンテは非情なドグマに由来する帰結を痛々しい努力で回避しようと試みるが²⁰⁾、結局のところ、ドグマを受け容れるほかはない。『帝政論』（第2巻7章4）で、「知的・道徳的諸徳により、習慣・行動においてどれだけ完全であろうとも、信仰なしではないびとも救われることはない。キリストのことをかつて一度も聞いたことがないとすれば」²¹⁾と、ダンテははっきりと述べている。一旦ドグマを受け容れてしまえば、すべきは人間の知性に納得のゆく合理的な説明をあたえるのではなく、人間の知性を黙らせること、神の裁決に対して不平をこぼさぬよう人間の知性に勧告することである。それというのも、人間の弱い視力（知力）では計りがたい神慮の謎を見通すことは不可能だからである。人間の知性を黙らせるべく、アリストテレス的な「中庸」（*mediocritas aurea*）の徳と徒らな「好奇心」（*curiositas*）を戒めるキリスト教道徳が協力する。限度をわきまえない知識欲は「過剰」の悪徳に陥るのみならず、自然の秩序をかき乱すことにもなる。なぜなら、ダンテによれば、「現世における人間の欲望は現世において到達可能な知識にむけられている。その限界を越えることは錯誤にほかならず、自然の意図しないことだ」（『饗宴』第3巻15章9）からである。注目すべきは、ここでもダンテが自然の側に位置していることであろう。しかしながら、自然の意図とは最終的には神に遡るものであろう。自然は神の忠実な婢にすぎないからである。神と自然が定めた限界を越える誤りが「高慢」（*superbia*）であるならば、「謙遜」（*humilitas*）とは自然と神が定めた規則に忍耐強く従うことである。「高慢」に対する警告は聖書の随所に見られるが、一例としては「集会の書」の一節（3, 22）を挙げることができよう。「おまえの手に余ることを知ろうとはするな。おまえには難解すぎることを詮索するな。だが、神が命じられたことを常に忘れるな。神に関わる多くのことに好奇心を抱くな。『水陸論』においてダンテは同じ警告をするために、「ヨブ記」の一節（11, 7：「神が残された痕跡を多分おまえは読み切れるのだろうか、全能者を完全に理解できるのだろうか）」と、「ローマ人への手紙」の一節（11, 33：「神の豊かな知恵と知識は何と深遠なことだろう。神の裁定は何と理解しがたく、神の道は何と究めがたいことだろう」）を引用している。そして、コンティーニが「ダンテの友」と名づけた匿

名詩人のソネットには「中庸」と「謙遜」の繋がりが見事に捕捉されている。

友よ、われらは旅の途上にあり、
申し開きの場に行かねばならない。
すなわち、われらの過失のゆえに失うことがなければ、
われらを創りたもうたお方が約束された幸福へと
赴かねばならないのだ。だが、高慢や尊大は
そのようなお方の館にあがることはできない。
謙遜な心こそがいつの日も、そこに昇ることを
可能にしてくれる徳なのである。

思うに、同様にして現世でも、
他人に知られたら恥となるほどの高みを
目指すことは悪徳だというべきだろう。
段階を中程度に昇る者、
しまいには恥辱になるような跳躍を
決してしない者こそ、賢者なのである。²³⁾

「謙遜」と「高慢」。ふたつの範疇は『神曲』の中に典型的な代表者をもって
いる。一方には憂愁のこめられた諦念とともに神の定めにしたがい、「三つの位
格において一つの実質をもつ〔神の〕無限の道を、われら〔人間の〕知性をも
って究め尽くせると望む者は狂気の沙汰である。人と生まれた者どもよ、〔理由
を詮索することなく〕事実のみを知ること甘んじよ」（『煉獄篇』第3歌34-37）
と弟子を諫めるウェルギリウス、他方には狭義の「高慢」ゆえに神と等しくな
ろうとして「自分の創造者に対して眼をむけた（＝反抗した）」ルチーフエロが
いる。この墮落天使の党派には、人類の祖アダムが属している。なぜなら、神
の言いつけに背いたアダムの罪は「限度を越える」（『天国篇』第26歌117）こ
とにほかならないからである。同じ党派には、まさしく「好奇心」ゆえに大海に
乗り出し、「常軌を逸した飛翔」（『地獄篇』第26歌125）を試みて失敗するウリ
クセスも属している²³⁾。これに対して、登場人物としてのダンテはルチーア
やベアトリーチェを介して天上から降り注ぐ恩恵に助けられて至高天へと「高

き飛翔)〔天国篇〕第15歌54、第25歌50)を遂げる。「謙遜」の徳をもって自らの宿命にしたがうウェルギリウスには、しかしながら天国の敷居をまたぐことが許されない。ダンテの世界観では、宿命とは神慮以外のなにものでもなく²⁴⁾、神慮が善の絶対的尺度であるから、人間には「神の裁定を悲しむこと」(〔地獄篇〕第20歌30参照)は許されない。他方、神はあらゆるものの限界を好きなように定め、善・悪や正・不正、救われる者・墮地獄の者の境界線を自分勝手に引くことができる。この場合、神は不可解で理解しがたい暴君のような存在として意識されることになろう。トロイア人リフェウスは例外的に救われている(〔天国篇〕第20歌68以下)が、今日の人間にとっては、むしろ神の裁定の気まぐれな側面が強調され、異教徒に救いの希望をもたらずというより、神秘のヴェールの厚みが増す結果となろう。このようなダンテの神を、ブレイクの言葉とイメージに翻訳するとどうなるのであろうか。

ブレイクの予言書と呼ばれる諸作品の読者にとっては、『神曲』の神とユリゼン(ブレイクが創りだした神話的登場人物)の間の対応は明瞭であろう。1794年の作『ヨーロッパ』の扉絵で、ユリゼン(Urizen)は聖書の句(〔ダニエル書〕7,9ほか: antiquus dierum)を用いて「年老いし者」(Ancient of Days)とも呼ばれているが、図6(367頁)に見られるように、跪いて手にコンパスを持った老人として描かれている²⁵⁾。コンパスは先に触れた計量原則を表わすシンボルであろう。この解釈は、自然の偉大な探求者ニュートンを描く際にブレイクが同じアトリビュートを与えているという事実によって支持されよう(図7, 367頁)²⁶⁾。1793年頃の短詩『ノボダディ(Nobodaddy)に』の中にユリゼンの姿を見出すことは困難ではあるまい。「誰の父でもない神」、「誰もが父とすることを拒みたくなるような神」をおそらく意味するものと思われるノボダディ(Nobodaddy)は、次のように描かれているからである。「嫉妬深き父よ、なに故そなたは沈黙し、そなたの姿は見えぬのか。捜し求める者すべての眼を避けて、なに故そなたは身を雲に隠されるのか。そなたの言葉と掟には、なにゆえ不明と晦渋がつきまとうのか」²⁷⁾。ブレイクはユリゼンやノボダディなどの新造語によって指し示される人物を創り出す際に、旧約聖書の「隠れた神」(〔イザヤ書〕8, 17; 45, 15; 57, 17や「詩篇」44, 24など)、「妬む神」(〔出エジプト記〕20, 5; 34, 14や「申命記」4, 24; 6, 15, 「ヨシュア記」24, 19など)に着想を得たであろうが、発想の

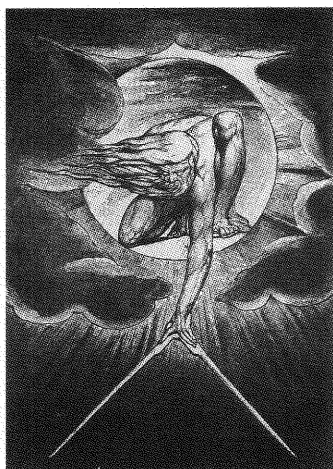


図6



図7

源泉には「智書」(11, 21) に述べられている神、すなわち「万物を尺と数と重さによって配剤し給ふた」神を加えてもよからう。ダンテは確実に「智書」を知っていた。「智書」の冒頭の一文「正義を愛せよ、汝ら、地を裁く者どもよ」(「天国篇」第18歌90-93参照)は、予定に関するダンテの疑問を受ける上述の鷲と密接に結びついているからである。それゆえ、「智書」の神と『神曲』の神の類縁性を想定することは根拠のないことではない。それに『神曲』の一節(「天国篇」第14歌30)は「[自らは] 限界づけられることなく、すべてを限界づける」者と神を性格づけてもいる。他方、「智書」的・ユリゼンの神に対するブレイクの反応はきわめて激越である。『結婚』に含まれた「地獄の諺」のいくつかがブレイクの立場を明確に示している。「過剰の道は英智の宮殿に通じる。……飢饉の年にこそ数や重さ、尺を持ちだすがよい。……過剰は美である」²⁸⁾。「飢饉の年にこそ数や重さ、尺を持ちだすがよい」とは、「豊作の年には、こせこせと計量する必要はない」の謂いであり、「溢れるような慈愛のあるところでは、量刑の必要はない」と解すべきものであろう。ともあれ、上に引用した「智書」との関連はきわめて明白であり、アリストテレス的な「中庸」に対する批判もほとんど



図8

ど透明である。実際、『結婚』の別の箇所、ブレイクはアリストテレス（ダンテにとっては哲学者の代名詞的存在）に対する否定的見解を示している。もっとも『結婚』では、ブレイクの擲揄の表向きの対象になっているのは、『分析論』である²⁹⁾。他方、ブレイクの有名な格言「対立は真の友」³⁰⁾が『ニコマコス倫理学』（VIII, 1, 1155b）に由来する可能性も否定できまい（対立から有益なもの生まれ、対立物から一層美しい調和が生まれるとするヘラクリトスの思想に、アリストテレスは言及している）。また、同じ『結婚』で注目に値するのは、神＝宿命に反抗を企てたミルトンの墮落天使が肯定的に評価されている点であろう。「しかしながら、ミルトン

にあっては、父なる神は宿命、子は五感に基づく哲学体系、聖霊は無にほかならない。忘れるな、天使や神を描く時にミルトンの筆が生彩を欠き、悪魔たちや地獄を描く時に濶達としている訳は、彼が真の詩人であり、無意識的に墮落天使の側に属していたからだ³¹⁾。墮落天使と同様、ブレイクは「好奇心」の犠牲となったウリクセースをも弁護したことであろう。1788年頃の作とされる『自然宗教は存在せず』（第2版）では、全・すべてによってしか満たされない、人間の無限の欲望が楽観的に肯定・擁護されているからである³²⁾。「神の憤りを招いた時と同様、ともに神の罰に服している」（『地獄篇』第26歌56-57）ウリクセースおよびディオメデスを描いた、ブレイクの挿絵は残念ながら未完である。二股の炎に包まれているのが明らかにウリクセースおよびディオメデスであるが、そのそばにダンテとウェルギリウスがかすかに描かれている。『神曲』のテキストに忠実なこの挿絵の中に、ウリクセースに対するブレイクの態度を読むことは難しい。ラオコーンに関しては、ブレイクは客観的な模写とより自由な主観的解釈のふたつを残している（図9、10、365頁）のであるが、ウリクセースに対しても同じ扱いをしてきていたならば、研究者らは大いに満足したこ

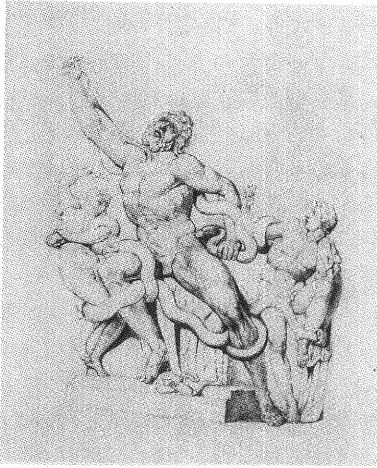


図9



図10

とであらう。

ウリクセースの抑えがたい知識欲に対してブレイクはおそらく共感を抱いたものと思われるが、このウリクセースに関して、人間がすべてを所有しすべてを知ることはいかにして可能なのかと、疑問が生じてこよう。人間が神と等しくでもならない限りは、そうしたことは不可能ではないか。だが、人間を神に引き上げることと、神を人間に引き下げるとは、同じことのふたつの側面であらう。神の摂理に代わって、人間の知性を善の唯一の尺度として据えようとするならば、その帰結は避けがたくある種の「神人同型論」にゆきつくことになろう。ブレイクはこのことにすでに1788年頃から気づいており、決してそれを避けようとはしなかった。実際、ブレイクの語彙の中には、「神聖なる人間性」(Divine-Humanity)³³⁾というシンタグマさえ存在している。ラーファターへの書き込みにおいて、「最も高い原因の中にも、最も低い結果の中にも神は居たもうのだ。なぜなら、弱き者を養うために神は蛆虫とされたからだ。覚えておくがよい。創造とは人間の弱さに応じて降りてきてくださる神のことなのだ。というのも、われらの主とは神の御言葉であり、地上のあらゆるものは神の御

言葉であり、本質において神だからである」³⁴と、ブレイクは述べている。年代的にも内容的にも、これと関連づけるべきは、1789年頃のものとして推定されるスエーデンボルグへの書き込みに見られる一節である。「人間は人間よりも大きな、いかなるものをも理解することはできない。それは、ちょうどカップには容量以上入らないのと同じである。だが、神とは人間なのだ。それは、人間が神をそのように考えるからではなく、神が人間の創造者だからなのである」³⁵。これらふたつの記述から引き出しうることは、神と人間はひとつの本質を共有していること、そして（いささか非論理的だが）この本質は神の御言葉であること。この共通の本質をダンテは一時期「創造的才能」(Poetic Genius)³⁶なる呼び方で指そうとしたが、やがて「想像力」という名称を用いるようになる。パークレーへの1820年頃の書き込みで、ブレイクは「想像力」を定義して「各人に宿る人間の永遠の身体」(the Human Eternal Body in Every Man)³⁷としているが、その直後にくる書き込みにおいては「想像力」は「各人に宿る神の身体」(Divine Body in Every Man)³⁸であるとしている。この矛盾はブレイクの「神人同型論」を前提とするとき氷解する見かけだけのものであろう。この「神人同型論」がなければ、同胞的かつ兄弟のような親しい神、われわれの中に宿ると同時に、われわれもまた彼の中に宿るような近い神³⁹は考えられまい。神であり人間であるイエスに愛着のこもった宗教心をむけるブレイク。他方、神秘と無限の神を物語る神学に対して痛ましい反応をかえすダンテ⁴⁰。両者の著しい違いはこの「神人同型論」に由来するのではあるまいか。

「恐るべきシンメトリー」の記述はここで一応の締めくくりとするが、ブレイクの言葉はしばしば格言的かつ断片的であるため、それを適切なコンテキストと関連づけて整合的な体系を再構築することはなかなか困難な作業である。このことは真摯な批判に心と耳を開くよう、研究者に警告するものであろう。批判を歓迎する。

〈図版リスト〉

図1：ギュスターヴ・ドレ、《バルトラン・デ・ボルン》(cf. Dante Alighieri, *La*

-
- Divina Commedia: Inferno*, a cura di Daniele Mattalia, Milano, Rizzoli, 1980, p.567)
- 図2：ウィリアム・ブレイク、《ベルトランとモスカ》（ダンテ・アリギエーリ『神曲——地獄篇』寿岳文章訳、東京、集英社、2003年、331頁参照）
- 図3：アルブレヒト・デューラー、《正義》（木村三郎『名画を読み解くアトリビュート』、東京・京都、淡交社、2002年、104頁参照）
- 図4：作者不明、《正義》（木村三郎、前掲書、103頁参照）
- 図5：ウルス・グラーフ、《大天使ミカエル》（木村三郎、前掲書、105頁参照）
- 図6：ウィリアム・ブレイク、《ユリゼン》（cfr. William Vaughan, *William Blake, with 46 color plates*, London, Thames and Hudson, 1977, pl. 8）
- 図7：ウィリアム・ブレイク、《ニュートン》（cfr. William Vaughan, *William Blake*, cit., pl. 12）
- 図8：ウィリアム・ブレイク、《ウリクセースとディオメデス》（前掲ダンテ『神曲——地獄篇』、303頁参照）
- 図9：ウィリアム・ブレイク、《ラオコン》1（cfr. *Drawings of William Blake: 92 Pencil Studies*. Selection, Introduction and Commentary by sir Geoffrey Keynes, NewYork, Dover Publications, Inc., 1970, pl. 58）
- 図10：ウィリアム・ブレイク、《ラオコン》2（cfr. *Drawings of William Blake: 92 Pencil Studies*, cit., pl. 59）
- 図11：作者不明、《ウラニア》（木村三郎、前掲書、78頁参照）
- 図12：ジョルジョーネ、《三人の哲学者》（cfr. *La nuova enciclopedia dell'arte Garzanti*, Milano, 1986, p.348）
- 図13：作者不明、《世界の創造者としてのキリスト》（ウィーン、国立図書館、Cod. 2554）
- 図14：作者不明、《正義》（木村三郎、前掲書、78頁参照）
- 図15：バーイ、『失樂園』第7巻224-31への挿絵

〈注〉

- 1) 本稿は、拙論「恐るべきシンメトリー——ダンテとブレイク」、『イタリア語イタリア文学研究』（東京大学文学部南欧語南欧文学研究室紀要）I、1995年、203-33頁を、東京大学大学院人文社会系研究科・21世紀COEプログラム「死生

学の構築」および東京大学フィレンツェ教育センター主催シンポジウム「洋の東西の美術と思想にみられる死後の世界観」（2003年3月21日フィレンツェ、ウフィッツィ美術館、マリアベキヤーノ図書館）のための原稿として短縮したものの。この機会に若干の修正と微細な考察を新たに加えたが、旧稿の基本的な立場は維持されている。

- 2) ブレイクからの引用はすべて、William Blake, *Complete Writings*, Edited by Geoffrey Keynes, London - Oxford - New York, Oxford University Press, 1976から行なう。略号 K はケインズの編集によるこのブレイク全集を表わし、この略号のあとに添えられた数字は頁数を示す。ブレイクの英語原文は次のとおり (K785): “Every thing in Dante’s *Comedia* shews that for Tyrannical Purposes he has made This World the Foundation of All, & the Goddess Nature Memory is his Inspirer & not Imagination the Holy Ghost. ... It seems as if Dante’s supreme Good was something Superior to the Father or Jesus; for if he gives his rain to the Evil & the Good, & his Sun to the Just & the Unjust, He could never have Built Dante’s Hell, nor the Hell of the Bible neither, in the way our Parsons explain it — It must have been originally Formed by the devil Himself; & So I understand it to have been. Whatever Book is for Vengeance for Sin & whatever Book is Against the Forgiveness of Sins is not of the father, but of Satan the Accuser & Father of Hell”. ブレイクの書き込みは明らかに『マタイ伝』の一節を踏まえている (cfr. Matt. 5, 45, “qui solem suum oriri facit super bonos et malos: et pluit super iustos et iniustos.”)。
- 3) Inf. XIV, 16; *ibid.* XIV, 120; Purg. XX, 95; Par. XVII, 53等を参照のこと。

本稿の執筆のあたって、引用の際に使用したダンテの諸著作のテキストとその略号は次のとおりである。引用・言及箇所を示すために用いたテキストの区分は、すべて下記の版に由来する。

Conv.= *Convivio*, a cura di C. Vasoli e D. De Robertis, 1988.

DC = *Divina Commedia*, a cura di N. Sapegno, 1957 (Inf.= Inferno; Purg.= Purgatorio; Par.= Paradiso).

DVE = *De vulgari eloquentia*, a cura di P. V. Mengaldo, 1979.

Egl.= *Egloge*, a cura di E. Cecchini, 1979.

Epis.= *Epistole*, a cura di A. Frugoni e G. Brugnoli, 1979.

Mon.= *Monarchia*, a cura di B. Nardi, 1979.

Ques.= *Questio de aqua et terra*, a cura di F.Mazzoni, 1979.

Rim.= *Rime*, a cura di G. Contini, 1984.

VN = *Vita Nuova*, a cura di D. De Robertis, 1984.

以上は、いずれも、“La letteratura italiana. Storia e Testi” (Milano-Napoli, Ricciardi) のシリーズに収録されたテキストである。

- 4) K780: Life for Life! Life for Life!
- 5) K780: Sacrifice on Sacrifice, Blood on Blood!
- 6) 同じ「投影」の別の例としては、Boccaccio, *Amorosa visione*, XXXVI, 10-12 (in G. Boccaccio, *Opere minori in volgare*, a cura di Mario Marti, vol. III, Milano, Rizzoli, 1971, p.358): “[La vendetta di Dio] si compesa al fatto fallo, si che igualmente / da ogni parte la bilancia pesa” (「神の復讐は犯された過失とびつたり釣合っているため、秤は両側に等しい重さを量る」—『愛の幻影』36歌10-12—) を挙げることができよう。罪と罰あるいは害と補償の間の正確な釣合いは、いわゆるダンテの「師」、ブルネット・ラティエニにとっても正義の基礎であった。Cfr. Brunetto Latini, *Livres dou Tresor*, II, xxviii, 8 (édition par F. J. Carmody, Genève, Slatkine reprint, 1975, pp.198-99): “Et pour çou que li sires de la justice s’efforce d’yaillier les choses ki ne sont ygaus, donc il li covient l’un ocire, l’autre navrer, l’autre chacier en exil, jusk’a tant k’il soit satisfet a celui ki a l’outrage receu. Et li sires de la justices s’efforce de recovrer, au mi de droite yagillance, le plus et le mains es choses profitables; et por ce tolt il a .i. et done a .i. autre, jusq’a tant k’il sont ygal. Dont il covient savoir en quel maniere il doit tolr au plus grant et baillier au maindre, et comme il face fere satisfaction des torfés quant il avient, issi que ses subtés vivent en bone fermeté d’yaillance”. = 「正義を司る為政者とは不均等な事態を均等化しようと努めるものであるから、害を受けた者が満足するように、ある者は死罪に処し、ある者は体罰に処し、またある者は追放に処さなければならない。正義を司る為政者は、有益な事柄における超過と不足を適正な均等の中央にもどそうと努力する。それゆえ、均等になるように一方からは奪い、他方には与えるのである。したがって知っておかなければならないのは、どのような仕方でも最大のところから取りさり、最小のところと与えるかということ、罪が生じた際にどのような仕方でも償いをさせ、臣民が均等さの揺るぎない安全さのうちに暮らせるようにするか、ということである」。
- 7) K413: Dante was an Emperor’s, a Caesar’s Man ... Dante gives too much Caesar:

he is not a Republican.

- 8) K615: The Modern Church Crucifies Christ with the Head Downwards.
 - 9) K748: Both read the Bible day & night, / But thou read'st black where I read white.
 - 10) K788: Our Father Augustus Caesar, who art in these thy Substantial Astronomical Telescopic Heavens, Holiness to thy Name or Title, & reverence to thy Shadow. Thy Kingship come upon Earth first & thence in Heaven. ... God is only an Allegory of Kings & nothing Else.
 - 11) K616: You cannot have Liberty in this World without what you call Moral Virtue, & you cannot have Moral Virtue without the Slavery of that half of the Human Race who hate what you call Moral Virtue.
 - 12) K776: Good & Evil are Riches & Poverty.
 - 13) K757: Forgiveness of Sins. This alone is the Gospel, & this is the Life & Immortality brought to light by Jesus.
 - 14) K761: Mutual Forgiveness of each Vice, / Such are the Gates of Paradise.
 - 15) K395: The Gospel is Forgiveness of Sins & has No Moral Precepts; these belong to Plato & Seneca & Nero.
 - 16) ボエティウスは、「予見」(praevidentia) と神の世界に対する配慮に満ちた眼差しとしての「摂理」(providentia) を区別している。Cfr. *Consolatio Philosophiae*, V, prosa vi (in Boethius, *The Theological Tractates*, Loeb Classical Library, p.426, ll.59-72). また、「永遠の今」という考えは、アウグスティヌスにも見られる。Cfr. *Confessiones*, XI, xiii (in St. Augustine, *Confessions*, Loeb Classical Library, vol.2, pp.234-237).
 - 17) K431: To see a World in a Grain of Sand / And a Heaven in a Wild Flower, / Hold Infinity in the palm of your hand / And Eternity in an hour.
 - 18) ブレイクにおける「記憶」の問題は、一方では美術における「アカデミズム」(その典型がレノルズであろうが、ブレイクはレノルズの著作に対して批判的な書き込みを残している) に対する評価、他方では古典古代の異教文化に対する評価と密接に結びついている。ブレイクは古代の異教文化がヘブライ文化の不完全な記憶に基づいているとみなしていた。
 - 19) K133: Predestination after this Life is more Abominable than Calvin's, & Swedenborg is such a Spiritual Predestinarian ... Cursed Folly!
-
-

-
- 20) Cfr. E. Moore, *Dante as a Religious Teacher, Especially in Relation to Catholic Doctrine*, in Id., *Studies in Dante*, Second Series, London, Oxford University Press, 1968 (1st ed. 1899), pp.1-78. 「予定」の問題に関して、「ダンテはあからさまに規定の教説を崩したりはしないが、その教説の足枷から自由になろうとして、時々発作的な努力をする。そのさまをまのあたりにすることは、ほとんど痛々しい」と、ムーアは述べている (ibid., p.42)。
- 21) ダンテのラテン語原文は次のとおり。“...nemo, quantumcunque moralibus et intellectualibus virtutibus et secundum habitum et secundum operationem perfectus, absque fide salvari potest, dato quod numquam aliquid de Cristo audiverit”.
- 22) «Amico di Dante», in *Poeti del Duecento*, a cura di G. Contini, Milano-Napoli, Ricciardi, 1960, vol.2, p.748:

Noi semo inn-un cammino e dovén gire
inn-uno loco, amico, di ragione
cioè al ben che Que' che.nne formòne,
se no'l perdem per lo nostro fallire,
n'ave promesso: ma non può salire
soperbia n.rrigoglio in tal magione;
ma 'l core umiliato ogni stagione
è la virtù per ch'uom vi può salire.
Similmente dico in questa vita,
che vizio tengo lo badare sì alto
che, quando si conosce, che n'abbi onta;
ma quegli è saggio che nel grado monta
mezzanamente, né mai non fa salto
che disinor gli torni a la finita.

このソネットに関しては、*La corona di casistica amorosa e le canzoni del cosiddetto “Amico di Dante”*, a cura di Irene Maffia Scariati, Roma-Padova, Antenore, 2002, pp.103-105も参照のこと。マッフィア・スカリアーティによれば、13行目の“mezzanamente”は2行目の“ragione”(＜RATIO = ‘misura’)と語源的なこ

とば遊びをなしており、まさに「正しい中庸にしたがって」(“secondo la giusta misura”)を意味するものとされる。

- 23) ダンテが描いたウリクセース(『地獄篇』第26歌)をめぐるのは、すでに多くの論文が書かれてきた。ここでは、拙論「ダンテとウリクセース」、『ルネサンスにおける異教的伝統の再検討』平成6年度科学研究費補助金〔総合研究(A)〕研究成果報告書、1995年、17-51頁に加えて、最近のものとしてMaria Corti, *La «favola» di Ulisse: invenzione dantesca?*, in Ead., *Percorsi dell'invenzione: il linguaggio poetico e Dante*, Torino, Einaudi, 1993, pp.113-45を挙げるにとどめておく。コルティは、「ウリクセースはダンテの否定的な分身である」というロートマンの立場を支持している。
- 24) この点では、ミルトンが描いた神も同じである。Cfr. *Paradise Lost*, VII, 173-74, “..., Necessitie and Chance / Approach not mee, and what I will is Fate” (*The Complete Poetry of John Milton*, edited by John T. Shawcross, Garden City [New York], Anchor Books [Doubleday & company, inc.], 1971, p.392).
- 25) ユリゼンという名称はギリシャ語の“ourizein” (=delimitate)に由来するのかもしれない。ブレイクがこの名称を最初に用いたのは1793年であるが、その段階でブレイクにギリシャ語の知識を有していたかどうかは必ずしも定かではない。ユリゼンを“your reason”に遡らせる説明もあるが、この第2の語源説によれば、ブレイクの神話体系は宇宙論だけではなく、精神の深部への探索という側面をももつことになろう。Cfr. “Urizen”, in S. F. Damon, *A Blake Dictionary*, Boulder, Shambhala, 1979, p.419.
- 26) ブレイクの特殊性あるいは独創性に関して判断を下すには、コンパスの図像的伝統を考慮する必要がある。ブレイクはその伝統の中で(あるいはその伝統に抗しながら)作業をしたと思われるからである。コンパスはデータの正確な計測に基づく学問(幾何学や天文学、地理学)を表わしうる(図11、357頁)。ジョルジョーネの《三人の哲学者》(ウィーン、美術史美術館)では、コンパスは近代哲学を特徴づけるものとして配されているように思われる(図12、357頁)。ロレンツォ・ロットの《寓意》(ワシントン)は、元来トレヴィーゾの司教デ・ロッシ(De' Rossi)の肖像(ナポリ、カーポディモンテ)と対になっていた作品であるが、ここでもコンパスはおそらく近代を特徴づけているように思われる。左手にコンパスを持ちつつ計測のためのその他の道具を集めている子供は画面の左側に配されているが、牧神などを描いた右手側の古代的画面と
-
-



図11



図12



図13



図14



図15

対照をなしているからである。右手側は断ち切られているのに、左手側に緑の枝を伸ばしている樹木など、この対照はその他の細部によって強調されている。有名なデューラーの《メランコリア》では、秤やコンパスなどの計測器が体液=気質的な特徴と結びつけられているが、ブレイクの《ニュートン》も同じ気質を共有しているように思われる。正確な計測の道具としてのコンパスは、世界の創造者としての神の知恵（「箴言」8, 27 「[神が] 天を準備された時、私 [=知恵] はその場に居合わせた。[神が] 深淵を狂いのない定規とコンパスで囲まれた時 [、私は居合わせた]」を参照）のみならず、正義をも表わしうる（図13、14）。それゆえ、デミウルゴスであり裁きの神であるユリゼンには、コンパスは恰好のアトリビュートと言うことができよう。コンパスを手にした創造主に関しては、黒岩三恵『「ビープル・モラリゼ」とゴシック期フランスの死生観（1）』、『死生学研究』、東京大学大学院人文社会系研究科、2003年春号、275（118）- 241（152）頁所収を参照のこと。正義とコンパスの連想は、幾何学的比例に基づく正義がアリストテレスの正義に関する議論全体の一部をなしていることを連想するならば、一層説得的であろう（『ニコマコス倫理学』V, 3, 1131b参照）。

ジョルジョーネおよびロットに関する情報、解釈に関しては同僚ルイジ・チェラントラに感謝する。また、エンリーコ・カステルノーヴォ教授およびチェーザレ・セグレ教授には、シルヴィア・デ・ラウデの研究に関する情報をくださったことに感謝する。「建築家としての神」という論点を深めてゆく上で、デ・ラウデの研究は今後参照しなければなるまい。チェラントラはさらに、バーイ (Baj) がミルトンの『失樂園』第7巻224-31 (Then staid the fervid Wheels, and his hand / He took the golden Compasses, prepar'd / In Gods Eternal store, to circumscribe / This Universe, and all created things: / One foot he center'd, and the other turn'd / Round through the vast profunditie obscure, / And said, thus farr extend, thus farr thy bounds, / This be thy just Circumference, O World) に挿絵を施している事実を親切にも複製とともに知らせてくれた (図15、356頁)。

- 27) K171: Why art thou silent & invisible / Father of Jealousy / Why dost thou hide thyself in clouds / From every seaching Eye / Why darkness & obscurity / In all thy words & laws...?
- 28) K150-52: The road of excess leads to the palace of wisdom. ... Bring out number, weight & measure in a year of dearth. ... Exuberance is Beauty.
- 29) 『結婚』に含まれた「記憶すべき幻影」(Memorable Fancy) の第4番目のものにおいては、猿どもの7つの住処から詩人が骸骨をもって帰ると、それがアリストテレスの『分析論』に変わる。この幻影の締めくくりには、“...it is but lost time to converse with you whose works are only Analytics” (K157)と書かれている。
- 30) K157: Opposition è true Friendship. Cfr. “Without Contraries is no progression” (K149); “There is a Negation, & there is a Contrary: / The negation must be destroy'd to redeem the Contraries” (K533).
『結婚』におけるキー・ワードのひとつ「活力」(energy)が、『ニコマコス倫理学』の「エネルゲイア」に由来する可能性も検討すべきであろう。
- 31) K150: But in Milton, the Father is Destiny, the Son a Ratio of five senses, & the Holy-ghost Vacuum! Note: The reason Milton wrote in fetters when he wrote of Angels & God, and at liberty when of Devils & Hell, is because he was a true poet and of the devil's party without knowing it.
- 32) Cfr. K97: ... less than All cannot satisfy Man. ... The desire of Man being Infinite,

-
- the possession is Infinite & himself Infinite.
- 33) Cfr. K672; 709. Per il sintagma "human form divine", vedi K117; 755.
- 34) K87: God is in the lowest effects as well as in the highest causes; for he is become a worm that he may nourish the weak. For let it be remember'd that creation is God descending according to the weakness of man, for our Lord is the word of God & every thing on earth is the word of God & in its essence is God.
- 35) K90: Man can have no idea of any thing greater than Man, as a cup cannot contain more than its capaciousness. But God is a man, not because he is so perciev'd by man, but because he is the creator of man.
- 36) Cfr. K90; 98; 153, ecc.
- 37) K773.
- 38) K773.
- 39) Cfr. K622: I am not a God afar off, I am a brother and friend; / Within your bosom I reside, and you reside in me.
- 40) Cfr. Giovanni Getto, *Aspetti della poetica di Dante*, Firenze, Sansoni, 1966 (seconda ed.), pp.226-28.

(うら・かずあき 東京大学大学院人文社会系研究科助教授)

Un'agghiacciante simmetria: William Blake, illustratore-lettore di Dante.

Kazuaki Ura

William Blake (1757-1827), illustratore della *Divina Commedia* lasciò commenti su Dante, piuttosto brevi e non molto numerosi ma che lasciano intravedere assai chiaramente un'agghiacciante simmetria ("fearful symmetry") fra i due poeti, italiano ed inglese. In questo breve saggio su Blake e Dante (originalmente letto in occasione del Convegno di Studi "Visioni dell'aldilà in oriente e occidente: arte e pensiero", organizzato dal 21st Century COE Program presso l'Università di Tokyo, Facoltà di Lettere e Centro Studi e Ricerche dell'Università di Tokyo in Firenze, 21 marzo 2003, Firenze, Loggiato degli Uffizi, Salone Magliabechiano) mi propongo di chiarire in che consista questa simmetria ossia contrasto radicale di carattere e personalità fra il vate fiorentino del basso medioevo ed il visionario londinese del romanticismo. La mia analisi si svolgerà e graviterà intorno ai due punti principali: 1) quello che Blake chiama «perdono dei peccati» ("forgiveness of sins") ed il suo contrario cioè la «vendetta» ("vengeance"); 2) il dio lontano e il dio vicino, problema strettamente legato al limite dell'intelletto umano ed alla predestinazione.

Nell'aldilà dantesco, retto e dominato dal principio della vendetta e dal rigore del contrappasso, Blake non scorse che una proiezione dell'idea di misura e proporzione: idea che è a fondamento della giustizia di questo mondo in cui viviamo (basti pensare che la dea di Giustizia è spesso dotata come attributo di una bilancia). Egli ritenne perciò Dante alquanto mondano e poco spirituale nel senso che tale idea basilare della giustizia è in sostanza uguale al principio di misura e proporzione dell'universo fisico-materiale. Il perdono dei peccati, d'altra parte, che Blake sostenne contrapponendolo alla vendetta, è completamente alieno dal mondo quantificabile nel senso che non vi è e non vi può essere proporzione fra il perdono ed il peccato appunto come non ve ne è alcuna fra l'infinito ed il finito. Sia chiaro che una proporzione può essere solo fra il peccato e la vendetta (cioè la punizione) che esso determina.

Il dio della vendetta nell'oltretomba dantesco è anche dio del mistero nel senso che il consiglio (ossia la provvidenza) di questo dio è reciso e isolato da un profondo abisso, non solo dall'intelletto umano ma anche da quello angelico. Questo dio lontano, protetto dalla morale cristiana che vieta la vana "curiositas" e battezzato Urizen nella mitologia blakiana, il poeta-incisore inglese lo rifiutò quasi con sdegno e, cercando il divino dentro l'umanità stessa, scoprì ciò che egli nomina «immaginazione» ("imagination"): concetto molto particolare che si potrebbe interpretare come principio trascendente ma anche immanente, in altri termini, dio sempre vicino in noi stessi. Da questa «immaginazione» speciale deriva il contrasto notevole fra Blake, da una parte, che mostra una affettuosa religiosità per Gesù dio-uomo e Dante, dall'altra, in cui la teologia del mistero e di Dio lontano desta un'alta eco patetica.

Nel saggio si tenta pure di individuare nella *Sapienza* (11, 21), dove si parla di Dio che dispose ogni cosa secondo misura e numero e peso, il bersaglio della critica che alcuni proverbi dell'*Inferno* contenuti nel *Marriage of Heaven and Hell* implicano: "La via dell'eccesso conduce al palazzo della sapienza. ... Tira fuori numero, peso e metro negli anni di penuria. ... L'esuberanza è bellezza".